

幼稚園イマージョン・プログラムにおける活動の変化

Changes in Classroom Interaction over Time in a Kindergarten Immersion Program

immersion program / classroom research / input

酒井英樹・浦野 研・和田順一

SAKAI Hideki, URANO Ken, & WADA Jun-ichi

I. はじめに

第1言語や第2言語学習者は、インプット提供者である親・母語話者・教師との相互交渉 (interaction) を通して、目標言語を獲得する。

第1言語獲得の研究者である Bruner (1988) は、子どもと母親の相互交渉を重要視している。イナイ・イナイ・バーという遊びを分析した Bruner は、母親と子どものやり取りが次第に長くなり、子どもの参加が積極的になったことを指摘している。さらに、そのやり取りの中で使われる言葉が複雑になったと述べている。Bruner (1988) は、「子どもは限られた情報処理能力しかもっていないから、もっか進行していることを理解するためには、ルーティン化したなじみ深い道具だて、いわばフォーマットが、初期の発話の相互作用におけるこの『調整』にとって必要なのだ」(p. 33)と考察している。すなわち、ルーティン化した活動が言語の獲得の足場 (scaffolding) となるのである。

第2言語獲得の研究では、インプットの言語的特徴の研究が多くなされてきた (for example, see Gass & Madden, 1985, Chaudron, 1988)。これは、第2言語学習者は「理解可能なインプット」を受け取ることによって目標言語を獲得すると考えられているからである (Krashen, 1985; Ellis, 1990)。インプットの言語的特徴と第2言語能力の発達が関係しているならば、発達段階に応じてインプットの特徴も変化すると考えられる。この点については、横断的研究 (Kleifgen, 1985) と縦断的研究 (Ellis, 1985; Tardif, 1994; Watanabe, Sakai, & Urano, 1995) の結果によって支持されている。つまり、これらの研究によれば、インプット (教師の発話) の言語的特徴 (統語レベル・談話レベル) は学習者の第2言語のレベルに応じて変化する。もし Bruner が母語習得において示したように、ルーティン化した相互交渉の場が言語の獲得と関わっているのならば、言語的な特徴だけではなく相互交渉の場である活動の特徴にも変化があると仮定できる。

本稿では、ある1つの活動を取り上げ、その活動の特徴がどのように変化するのかを分析する。言語的な特徴にとどまらず、より広い視点で活動の変化を考察する。さらに、教育的な示唆についても触れたい。

II. 研究方法

A. 幼稚園イマージョン・プログラムの概要

幼稚園イマージョン・プログラムの観察データを基に分析を行なった。カナダ出身の英語母語話者が17人の4歳児 (日本語話者) を担当している。園児は月曜日から金曜日まで10時30分頃登

園し、2時30分頃帰宅する。昼食と昼寝の時間が約1時間ずつある。午前中1時間30分と帰宅前30分間に、英語による活動が行なわれている。したがって、1日約2時間のインプットを浴びていることになる。幼稚園では、意味を中心としたシラバスで活動が組まれている。季節ごとの行事に合わせて、歌・単語・お話が選ばれている。基本的には、他の日本語クラスと類似した活動である。

園児は優れた理解力を示している。また、プログラム開始直後から発話し始め、2語以上を組み合わせた発話は10月を過ぎる頃から頻繁に見られる。園児の第2言語使用能力の発達については、酒井・小柳(1994)やWatanabe, Sakai, & Urano (1996)を見られたい。

B. 分析方法

6月・9月・2月の授業から、共通して行なわれた1つの活動を選んだ。「カレンダー活動」である。この活動の中では、曜日・日付・天候・数などの題材が扱われる。教具としてカレンダーやカードが用いられる。この活動を選んだ理由は次の2つである。第1に、「カレンダー活動」はきわめて日常的な活動である。この「カレンダー活動」は、毎日早い時間帯に行なわれ、時期を追って比較することができる。その他の活動は、時期的な題材や行事に基づいており、異なる時期では比較することができない。したがって、この活動は、本稿の目的に適しているといえる。第2に、「カレンダー活動」は幼稚園に限らない活動である。中学校の英語の授業にもよく取り入れられている。そのため、分析の結果が教育的な示唆に富むのではないかと考えた。

分析の観点は、次の3つである。(A) 活動の複雑さ、(B) 教師の発話、そして、(C) 園児の発話である。(A) 活動の複雑さからは、相互交渉の場の変化を分析することができる。(B) 教師の発話は、インプットの特徴の分析である。(C) 園児の発話は、学習者側の参加を分析することになる。教師の発話と園児の発話の分析手順や方法については、Watanabe, Sakai, & Urano (1995, 1996) を参照されたい。

III. 結果

A. 活動の複雑さ

表1は、活動の時間と、活動の中で行われた課題の数を示している。課題について説明を加えると、ここでは「カレンダー活動」を構成する小場面のことを課題と呼ぶ。例えば、6月の「カレンダー活動」は、(1) 曜日、(2) 日付、(3) 天気その1、(4) 天気その2、の4つの課題から成っている。天気その1では天気カードを持ち「What's this weather?」と質問するのに対して、天気その2では園児に天気カードを渡して天気カレンダーに貼らせている。2つの課題は異なるので、その1とその2に分けている。

表1. 活動の時間と課題数

時期	1995/6/8	1995/9/27	1996/2/26
時間	2'50	5'56	5'50
活動数	3	7	8

6月・9月・2月の活動時間の比は約1：2：2（2分50秒：5分56秒：5分50秒）であった。9月に、約3分から約6分へと、2倍に増加している。また、時間の増加に応じて、課題数も同様に増加している（詳細は、資料1を参照されたい）。つまり、「カレンダー活動」が時期に応じて変化していることがわかる。

B. 教師の発話

表2は、教師の発話数を示している。9月以降、発話数が増加しているのは、時間が長くなったからである。1分あたりの発話数を比較すると、教師の発話量にあまり変化がない。

表2. 発話数

時期	1995/6/8	1995/9/27	1996/2/26
教師の発話数	89	185	166
1分あたりの発話数	31.4	31.2	28.5

しかし、実際には教師の発話は増加しているように観察される。そこで、教師の発話の構造を調べた。表3は、教師の発話が、語句であったか（句構造）、文であったか（節構造）、という頻度と割合を示している。6月には、例えば Monday? といいた単語や What day? といいた句の発話が55%を占めるが、2月には、What day is it? といいた動詞を含む文の発話（節構造）が66%を占めるようになる。平均語数を調べてみると、文の発話（節構造）は語句よりも約3倍長い発話である。つまり、教師の発話量はかなり増加していると言わなくてはならない。

表3. 発話の構造

時期	1995/6/8	1995/9/27	1996/2/26
語句構造	38 (55.1%)	57 (41.6%)	33 (33.7%)
節構造	31 (44.9%)	80 (58.4%)	65 (66.3%)

さらに、言い換え・繰り返しを調べてみると(表4)、同じ内容を繰り返したり言い換えたりする発話が2月に激減していることがわかる。すなわち、教師は新しい情報を話すようになっていると考えられる。

表4. 言い換え・繰り返し

時期	1995/6/8	1995/9/27	1996/2/26
言い換え・繰り返し	21	41	22
1分あたりの数	7.4	6.9	3.8

以上、教師の発話の分析から、発話数に変化は見られないが、詳細に分析してみると、発話の構造が句構造から節構造へとより長く難しく変化しており、言い換えや繰り返しが減少し新しい情報

や表現を話していることが明らかになった。つまり、教師の発話の点からも、時期を追って、複雑になっていると言える。

C. 園児の発話

表5は、園児の発話数を表している。園児の発話数は時期を追うごとに増加している。さらに、2語以上の発話数を見ると、園児は9月に2語以上の発話を行なうようになるが、2月になると長い発話を多くするようになることがわかる(94中5:95中19)。活動の分析で9月と2月で時間に違いが見られないことを考慮すると、園児は積極的に活動に参加するようになってきていることを示している。

表5. 園児の発話

時期	1995/6/8	1995/9/27	1996/2/26
園児の発話数	34	94	95
1分あたりの発話数	12	15.8	16.3
2語以上の発話数	1	5	19

IV. 考察・結論

1つの活動(「カレンダー活動」)を時期を追って分析してきた。結論として、同じ活動は決して同じ発話・行動の繰り返しではないことが示された。園児の言語能力の発達に応じて、活動はより細分化し複雑になった。また、時間も長くなった。教師の発話は、先行研究(Kleifgen, 1985, Ellis, 1985, Tardif, 1994, Watanabe, Sakai, & Urano, 1995)で報告されたように、難しくなっていった。園児の発話は、次第に増加し、長い発話も頻繁に見られるようになった。これは、園児の活動への参加が活発になったことを示唆している。これらのデータをまとめると、1つの活動が発展的に拡大したことを指摘できるであろう。別な言い方をすれば、Brunerが第1言語獲得の過程で示したように、第2言語獲得においても、学習者が持っている知識や体験を十分利用して、その上に、新しい要素を少しずつ加えていく過程が見られるのである。活動の場面が、Brunerの言葉を借りれば、「ルーティン化」されていると言える。このことが教師のインプットを理解しやすくし、言葉の発達を促進しているのではないだろうか。

V. 展望

長期に渡って同じ活動を繰り返して行なうことの意義をもう一度問い直す必要がある。英語の授業において、とかく新しい活動・新しい歌・新しいゲームが取り入れられる傾向がある。一度行なった活動は、避けられるのである。例えば、曜日・日付・天気を問う時間は、次第に少なくなっただろうか。学習者の言語能力が高くなったから、新しい活動を次から次へと行なうのではなく、同じ活動を少しずつ変化させて行なうことが重要であろう。同じ活動であっても学習者の言語発達に応じて内容を調整することができる。活動の反復は、学習者のインプットの吸収を促進すると考えら

れる。渡辺・野澤・酒井 (1997) は、中学校における具体的な実践を報告している。中学校 1 年生の英語の授業開始を、生徒の能力に応じて発展させていくのである。形式的になりがちな授業開始のやり取りを、生徒の英語力に応じて変化させることで、コミュニケーションの場として位置づけることができる」と指摘している。このように、活動を継続的に行なうことは様々な英語教育の場面で実践させて良いと思われる。

本稿では、1つの活動を、(A) 複雑さ、(B) 教師の発話、(C) 園児の発話の点から、その変化を分析してきた。そして、学習者のレベルに応じて、活動が変化していることがわかった。さらに、同じ活動を繰り返して行なう意義を再考することが示唆された。

(長野県丸子北中学校・ハワイ大学大学院・信州大学大学院)

(注) 本稿は、1996年3月20日、JATEC 創立 15 周年記念中部地区研究大会で、「長野幼稚園における英語イマージョン・プログラム：ビデオによる授業研究」(酒井英樹・浦野研)として発表した内容を基にして論文にまとめたものである。

引用文献

- Bruner, J.S. 1983. *Child's Talk: Learning to Use Language*. Oxford: Oxford University Press. [寺田晃・本郷一夫 (訳) 1988. 『乳幼児の話しことば：コミュニケーションの学習』東京: 新曜社.]
- Chaudron, C. 1988. *Second Language Classrooms: Research on Teaching and Learning*. Cambridge: CUP.
- Ellis, R. 1985. "Teacher-pupil interaction in second language development" in Gass, S.M. & C. Madden (eds.), *Input in Second Language Acquisition*. pp. 69-85.
- Ellis, R. 1990. *Instructed Second Language Acquisition*. Oxford: Blackwell.
- Gass, S.M. & Madden, C. (eds.) 1985. *Input in Second Language Acquisition*. Cambridge: Newbury.
- Krashen, S.D. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. New York: Longman.
- Kleifgen, J.A. 1985. "Skilled variation in a kindergarten teacher's use of foreigner talk" in Gass S.M. & C. Madden (eds.), *Input in Second Language Acquisition*. pp. 59-68. Newbury.
- 酒井英樹・小柳昭喜. 1994. 「幼稚園児の第二言語習得：自発的な言語使用能力の獲得とインプット量との関係に関する研究」『中部地区英語教育学会紀要』第 24 号, pp. 193-198.
- Tardif, C. 1994. "Classroom teacher talk in early immersion program." *Canadian Modern Language Review*, 50(3), pp. 466-481.
- Watanabe, T., Sakai, H., & Urano, K. 1995. "Teacher talk in kindergarten immersion program: Teacher's speech modification over time." 『中部地区英語教育学会紀要』第 25 号, pp. 151-156.
- Watanabe, T., Sakai, H., & Urano, K. 1996. "Teacher talk in kindergarten immersion program: Input and the development of spontaneous production ability." *ARELE*, 7, pp. 101-110.
- 渡辺時夫・野澤重典・酒井英樹. 1997. 「MERRIER Approach のすすめ：コミュニケーションができる生徒を目指して 3 : Warm-up 段階での活用 中学 1 年生の授業で」『英語教育 6 月号』大修館, pp. 32-33.

資料 1. 授業内容

95/6/8

T: Teacher

C: Class(Chorus)

S: Student

番号	課題	内容
1.	曜日	T : 黒板にあるカードを指し示す。 C : 曜日を読む。
2.	日付	T : カレンダーのカードを持ち、質問する。 “What day is this?” C : “Today is Thursday, June 8.”
3.	天気(1)	T : 天気のカード(絵)を持ち、質問する。 “What’s the weather?” “Is it sunny?”
4.	天気(2)	T : 園児にカードを渡す。 S : “Today’s weather is cloudy.” カードを天気カレンダーに貼る。

95/9/27

1.	曜日(1)	T : カレンダーを指し示し、質問する。 “What day is it today?” C : “Wednesday, September 27”
2.	曜日(2)	T : 園児に質問する。園児が答えられないときにはカレンダーを指し示す。 “What day is it today?” S : “Today is Wednesday, September 27”
3.	数	T : 園児に棒を渡す。 S : 棒でカレンダーを指す。 C : 1 - 2 7。 2 7 - 1。
4.	曜日(3)	T : 質問する。カレンダーを指し示す。 “What day is it today?” “What was yesterday?” “Tomorrow will be?” C : “Wednesday” “Tuesday” “Thursday”
5.	曜日(4)	T : 黒板にカード(文字)を貼っておく。園児に選ばせる。 “Can you find Wednesday?” “What’s yesterday?” “What’s tomorrow?” S : カードを選ぶ。曜日の用紙に貼る。 “Today is _____.” “Yesterday is _____.” “Tomorrow will be _____.”
6.	天気(1)	T : 質問する。 “What’s the weather today?” “Is it sunny?” C : “Sunny.”
7.	天気(2)	T : 園児にカードを渡す。 S : “Today’s weather is sunny.” S : カードを天気カレンダーに貼る。

96/2/26

1.	曜日(1)	T : カレンダーを指し示す。 “Can you tell me what day it is today?” C : “Monday, February 26.”
2.	曜日(2)	T : カードを見せながら、質問する。 “What day is it today?” T : 園児にカードを渡す。カレンダーを指し示す。 S : “Today is Monday, February 26.” T : クラス・園児に質問する。 “What was yesterday?” “What’s tomorrow?” C : “Sunday, February 25.” “Tuesday, February 27.”
3.	曜日(3)	T : カレンダーを指し示しながら、質問する。 “What’s this one?” C : “Tuesday.” “Saturday.”
4.	数	T : カードを持ち、質問する。 “What’s this number?” S : “26.” “4.”
5.	天気(1)	T : 質問する。 “What’s the weather today?” “Is it cloudy?” C : “Cloudy.”
6.	天気(2)	T : 質問する。 “Where’s cloudy?” S : カードを選ぶ。 S : “Today’s weather is cloudy.”
7.	天気(3)	T : カードを持ち、質問する。 “How do you spell cloudy?” C : “C, L, O, U, D, Y.” S : カードを天気カレンダーに貼る。
8.	天気(4)	T : 箱を持つ。質問する。 “Can you find cloudy here?” S : 箱からカードを選ぶ。 S : “Today’s weather is cloudy.” S : 天気カレンダーに貼る。